目　　次

1　研究主題の基本的な考え方 …… 1

⑴　平成29年度研究主題について

⑵　次期学習指導要領のとらえ方

⑶　研究の仮説

⑷　研究の内容

⑸　研究組織

2　各部の活動 …… 4

⑴　授業研究部

⑵　活動研究部

⑶　記録調査部

3　各部の指導の成果 …… 5

⑴　授業研究部

⑵　活動研究部

⑶　記録調査部

4　保護者との連携 …… 12

5　研究の成果と課題 …… 12

終章　平成30年度の研究 …… 14

⑴　平成29年度までの学級会の成果

⑵　国語科で求められること

⑶　研究の内容

第６分科会（校内研修）

自ら考え、進んで発表できる子どもを育成する校内研修の在り方
－特に学級活動、国語科において子どもの考えを引き出す教師の支援の研究－

提案者　足利市立北郷小学校教諭　　内田　仁志

１　研究主題の基本的な考え方

⑴　平成29年度研究主題について

①　平成29年度研究主題

自ら考え、進んで発表できる子どもの育成

－学級活動で子どもの発表を引き出す教師の支援の在り方の研究－

②　主題設定の理由

ア）児童アンケート、学力テストにおける実態

○　調査記録部の分析から明らかになった結果

・全校的に学級活動は好き、話合いは好きだが、意見を進んで言うことが上学年になるにつれて減少している。

・自分の考えはもっているが、上学年になると表現できない。

・学級会でみんなが決めたことについて守ろうという意識がある。

・自分も他人も大切にしないから他人にも大切にされていない傾向がある。

○　学力テスト等における北郷小児童の実態

・３年間の学力テストの調査結果から、本校の児童の学力は、「話す・聞く」領域に関しては、意欲の高さと比較して、十分に結果がともなっていない。

イ）児童アンケート、学力テストからの考察

・同一集団を経年で考察しても学力の伸びが全く見られていないことが分かる。したがって今までの学力向上対策が効果を見せていない。「ぐんぐんタイム」等は効果を上げていないことが分かる。

・児童はアンケートの結果から、話合いは好きだが意見を言うのは苦手という結果が出ている。したがって、ただの話、友だち同士でしゃべるのは好きだが公的な場での話は苦手意識があることが分かる。これは県教委の調査結果（言語事項調査）と結果は全く同じである。

・調査結果から、児童は身に付けていかなければならない「話す聞く」能力に苦手意識があるのに、話合いの授業は好きだという結果が出ている。このことから児童は「学ぶこと」を回避している。そして「できる喜び」を体感していないことが分かる。

ウ）調査結果からの対策

・学力向上は喫緊の課題である。したがって学級活動を研究の柱に据えながら、どのような学力が身に付くかを検討し、確かな学力を身に付けなければならないと考える。

・特別活動の研究発表が終わると、新しい学習指導要領に備えた校内研修を開始しなければならない。したがって、新指導要領に備えた研究を盛り込むことが必要である。これは以前の推進委員会で出た意見「研究が終わっても続く研究をしたい」ということからも合致する。

・今回の学習指導要領でも重点策として掲げられた「言語活動の充実」がより一層強調された。更に、今回は論理的な思考が求められている。これは、「おしゃべりは好きだが話合いは苦手」という北郷小児童にとって、極めて獲得が難しい能力である。

・いじめ問題については、いじめられた子のケア対策ではなく、「してはいけないことはしない」という概念が強調された。これは一見、今のいじめ対策とは相反するように感じられるかもしれないが、すでに「いじめ防止対策推進法」でいじめた子には登校を停止するなどの対策（例外ない指導、毅然とした対応）が取られている。したがって、学校全体で決まりを守る集団を作り、児童の安心感、集団への帰属意識をもたせることが必要である。

エ）研究の方針として

① 研究発表大会のテーマを「学級活動」に集約する。

② 特に、北郷小の児童が苦手意識をもっている「公的な場での話し方（おしゃべりではなくあらたまった場）」を育てる。

③ 学力向上を最大の目標にする。今までの対策が効果を上げなかったことを踏まえ、授業に関して根本的に見直す必要がある。また、学力向上対策を北郷小の職員が本気になって取り組んでいることを家庭に示す必要がある。

オ）結　論

・新学習指導要領では、「言語活動の充実（説明、発表等）」「主体的な読み・書く能力の育成」（文科省では最近、「アクティブ・ラーニング」という言葉は使わずに、このように表現するようになりました。）などの表現力が求められている。

・本校の児童の実態は、「話す力・聞く力」に苦手意識をもっている。そして、そのことは表現力を求める活用問題の学力テストの結果からも実力が身に付いていないのは明らかである。

◎したがって、研究主題は「話す力・聞く力」を前面に打ち出したものにしたい。そして、本研究が終わった後も「話す力・聞く力」を継続研究し、研究の成果が足利のみならず栃木県をリードするものにしたい。

⑵　新学習指導要領のとらえ方

①　2020年の全面実施に向けて

2020年（平成32年）から新学習指導要領が全面実施される。英語活動が加わる。例えば英語に慣れ親しみ、「聞く・話す」を中心とした『外国語活動』を小３、４年で、そこに「読む・書く」を加えた正式教科『外国語（英語）』を小５・６年で履修することになる。各学年年間35単位時間ずつ増やすことが予定されている。

ハード面では明らかに学習内容が増えるが、学習活動も大きく変化することが予想される。これまでの授業を聞くだけではなく、聞いた授業や調べた学習内容を自分から発信する能力が求められるようになる。自分から進んで学習し、分かったことを発信する能力がアクティブ・ラーニング（現在では主体的・対話的で深い学びという言葉に代わられているが）には求められている。

②　主題の意味

・新学習指導要領では「言語活動の充実（説明、発表等）」「主体的な読み・書く能力の育成」などの表現力が求められている。

・本校の児童は、「話す力・聞く力」に苦手意識をもっている。そして、そのことは、活用問題の学力テストの結果からも明らかである。

○　研修とは教師を授業の職人「達人」に仕上げることが目的であり、全職員を同一のレベルに仕上げるシステムのことである。したがって、研究主題の主語は「教師」である。この点からも昨年度のタイトル「育成」という文言は学校の研修への気概を示すものであり踏襲する。

⑶　研究の仮説

集団との関わりを通して自己選択・自己決定していくことにより、集団の一員としての自覚が芽生え、当事者意識が高まり、意欲的に活動する児童に育つであろう。また、様々な望ましい集団活動を体験していくことにより、学校・学級生活において自分が役立っていることを実感し、自己有用感のもてる児童になるだろう。

自己選択・自己決定においては、児童のもつ言語能力が重要になる。したがって、言語能力を育てることが喫緊の課題となる。

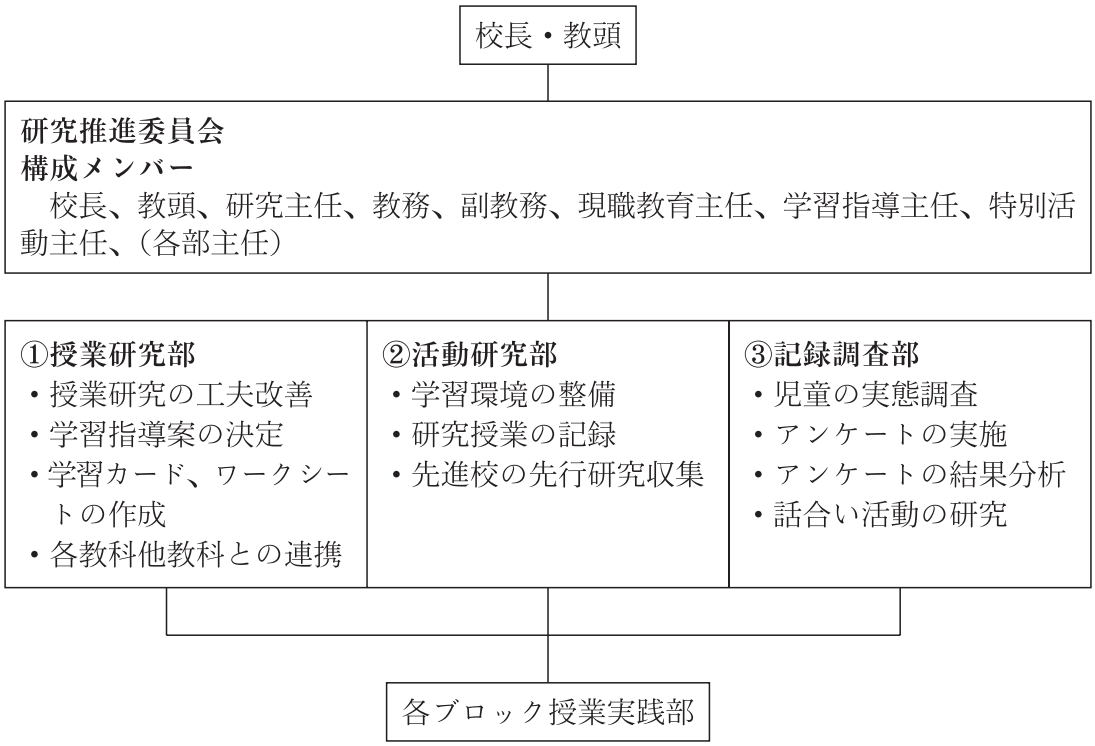
⑷　研究の内容

特別活動の特質と児童の発達段階を踏まえ、学級活動を中核に据えた指導の在り方を明らかにし、自主的実践的な活動を重視した集団活動を構築する。

・よく考え、判断し、思いを伝える活動の工夫

・学校、学級への所属感や自己有用感が高まる集団活動の工夫

⑸　研究組織



2　各部の活動

⑴　授業研究部

●活動内容の確認

・授業に関わる指導案、学習準備（教材）の確認、学級会の進行マニュアルの作成等

●話合い事項

・特別活動主任が中心になり、学年部を組織する。（学年に一人学級活動担当を置く）

・想定される議題を予め設定しておく。

・ノート、ワークシート等授業で必要なものは学年で統一しておく。

・授業に関する準備物は活動研究部に依頼。作成をお願いする。

●来年度までの課題

・話合いマニュアルを低中高学年ごとに作成する。（３月中）

・ハンドサイン等、授業の約束を明確にしておく。

・研究主題と研究の視点を明確にする。

⑵　活動研究部

●活動内容の確認

・異学年活動の充実

　レッツ５、児童会集会活動の仕方・もち方についての検討

・議題ポストや掲示物、司会、副議長等を明示する名札の作成

・学級会ノートの検討、作成

●話合い事項

・議題ポストの設置（各学級1つ）

・学級会ノート（形式も含めて）

・話合いの進め方

・掲示物（教室の掲示、議長団の札、黒板の掲示物）

●仕事の手順

・小道具、学級会ノートを集める。（資料として）各先生にお願いする。

・学級会ノートの検討

・掲示物を作成（新年度から）

⑶　記録調査部

●活動内容の確認

・記録したものの保存整理

・調査内容アンケートの実施

●話合いの内容

・特活アンケートの作成（別紙）

3　各部の指導の成果

⑴　授業研究部

【指導案の形式決定】

特別活動における学級活動の指導案について（例示）

第２学年　学級活動指導案

授業者　第２学年１組担任　　内田　仁志

1　題材　「きもちのよいあいさつ」

2　題材設定の理由

⑴　活動内容・項目

☆　主たる内容・項目

⑵　日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること

○　基本的な生活習慣に関すること

★　関連する内容・項目

○　望ましい人間関係の育成

⑶　題材設定の背景

本来子ども達が家族や友達との日常的な関わりの中で自然に身に付けていくべき社会性が、どんどん身に付かないまま成長してしまう傾向にある。そのためできるだけ早い時期に、社会性を意図的に身に付けさせる必要性が叫ばれてきている。今回取り上げるあいさつもその一つと考えられる。

⑷　題材に関わる児童の実態

あいさつをしようとする姿は見られるものの、元気よくはっきりと心をこめた「きもちのよいあいさつ」ができる児童も減ってきているという声が聞かれる。

今回行う「きもちのよいあいさつ」では、どんなあいさつがよいあいさつかをモデリングを通して考えさせ、更にその場で実際に練習するソーシャルスキルトレーニングを取り入れることで、学級のよりよい人間関係づくりのきっかけとしていきたい。

⑸　指導法・指導上の留意点

①　ソーシャル・スキル・トレーニング（※１）を授業に取り入れ、「きもちのよいあいさつ」の練習を体験することで、日常生活にあいさつを定着させる。

②　このソーシャル・スキル・トレーニングの進め方は、「インストラクション」、「モデリング」、「リハーサル」、「フィードバック」、「定着化」の手順を踏むことを大切にする。本授業も、子ども達の実態に応じて重点化を図ったり、数回に分けたりしながら柔軟に進める。

※１　対人的なこと、人間関係に関することについて、知識や経験に裏付けされた技術・技能を模擬体験を通して訓練する手法

3　評価規準

関心・意欲 態度	・「きもちのよいあいさつ」はどのようなあいさつか考えようとしていたか。
思考・判断 実践	・あいさつをしたり、相手からあいさつを返されたときの気持ちについて振り返れたか。
知識・理解	・「きもちのよいあいさつ」はどのようにするか分かったか。

4　指導計画

事前・事後指導

事前指導	帰りの会	あいさつについての意識調査
本　　時	学級活動	きもちのよいあいさつ
事後指導	日常生活	あいさつの定着を観察

5　本時の指導

⑴　目　標

①　「きもちのよいあいさつ」はどんなあいさつか考え、あいさつの仕方を身に付ける。

②　「きもちのよいあいさつ」を体験することで、心地よさを味わい、進んであいさつができるようにする。

⑵　展　開

展開	活動の内容	指導上の留意点	評価・資料
導　入 （５分）	1　本時のねらいを理解する。 ・「今日は１日を楽しく過ごすための魔法の言葉を勉強しましょう 」	○　どんな言葉を言ったら１日を楽しく過ごせるかについての問題意識をもたせる。	◇意識調査 【評価１】
展　開 (30分)	2　あいさつの練習をする。 ⑴　教師の２種類のあいさつを見て考える。 3　「きもちのよいあいさつ」の練習をする。 ⑴　「きもちのよいあいさつ」はどんなあいさつか確かめる。 ・元気にはっきり ・相手を見て ・心をこめて ⑵　もう一度「きもちのよいあいさつ」の練習をする。 4　「あいさつリレー」ゲームをする。 ⑴　やり方の説明を聞く。 ⑵　グループごとに「誰にどんな」あいさつを言うか考える。 ⑶　あいさつリレーを行う。(右回り・左回り)	○　教師のモデリングでは「下を向き元気のないあいさつ」と「視線を合わせ、にこっと笑顔でのあいさつ」を演技して見せ違いを考えさせる。 ○　２人ペアで交代しながら「元気」「はっきり」に気を付け、あいさつの練習をさせる。 ○　２人ペアで上手にできている子を見つけておき、みんなの前でやってもらい、「きもちのよいあいさつ」についてまとめさせる。 ○　「きもちのよいあいさつ」をすると、あたたかい気持ちになることに気付かせる。 ○　グループ（８人程度）ごとに手をつないで輪になり、隣の人にあいさつしたら、あいさつされた人はあいさつを返した後、反対の人にあいさつするようやり方を説明する。 ○　グループで誰にどんなあいさつを練習したいか相談させ、日常にすぐに生かせる工夫をする。 ○　相手によってあいさつの仕方が変わることから、同じ方向ばかりでなく、反対にもあいさつさせる。	
まとめ (10分)	5　本時の活動を振り返り、気付いたことや考えたことを「ふりかえりカード」に書く。	○あいさつをしたり、相手からあいさつを返されたりしたときの気持ちを考えさせ、今後の意欲付けをする。	◇ふりかえりカード

※　本時は学級指導として行ったため「１　題材」となっている。児童から出された議論等を扱う場合は「１　議題」となる。

⑵　活動研究部

活動研究部では前項で記したとおり、アンケート実施及び考察が主な研究内容となる。本項で、児童のアンケートの実際と考察を述べる。

ア）児童の実態

【表１　平成29年度アンケート結果　平成29年７月実施】

北郷小学校　学級活動アンケート集計結果（全校）

No.	質　問　内　容	思う	少し思う	あまり思わない	思わない
1	学級活動に楽しく取り組んでいますか。	323	179	30	11
2	話合い活動はすきですか。	242	198	83	17
3	自分の意見を進んで言うことができますか。	169	194	96	51
4	友達の意見を聞いて自分の意見とくらべることができますか。	229	198	83	30
5	みんなで決めたことに進んで取り組むことができましたか。	326	162	41	10
6	友達のよいところを進んで見つけて伝えることができますか。	216	218	77	23
7	自分はまわりの人に大切にされていると思いますか。	242	180	63	39
8	自分のことがすきですか。	178	198	74	58

イ）アンケートの結果からの考察

話合い活動について「好きかどうか」を問うと、全学年とも70％前後の児童が「思う」「少し思う」と回答している。また「自分の意見を進んで言ったり、友だちの意見と比べて聞いたりすることができる」と60％以上の児童が回答している。この結果及び児童の実態を観察すると、次の二つのことが分かる。

第一に、児童にとって話合い活動は「好きか、嫌いか」のレベルにとどまっている。したがって、話合い活動により問題を深く追究したり、よりよい解答に導いたりという意識はない。

第二に、教師側の指導を振り返る必要がある。本アンケートでは明らかにされていないが、学習状況調査の結果から「話す力・聞く力」の育成が本校では急務である。それは単に話合い活動を取り入れればよい、楽しいからよいというレベルではなく、考えをより深めていく活動にしなければならない。

以上、社会的な背景からの要請（現行の平成20年告示学習指導要領が目指す児童像）と児童の実態の両面から、授業について次のように結論付ける。

・話合い活動を授業に取り入れる。その話合い活動は単なる思いつきの話合いではなく、話し合うことにより考えが深まりよりよい答えを導くような話合いにする。したがって、自分の答えを主張し、その後、相手の答えを聞いて自分の考えと比較して考えを練り上げるという学習過程にする。これには学級会での議論指導が最も適している。本研究は児童の実態と社会的な要請の両面から有効な研究である。

⑶　記録調査部

【話型の提示】

記録調査部では、学級活動全般を通して話型を研究している。その話型に則って、児童は学級会を進行するようにしている。以下に学級会の話型の例を示す。

活動カレンダー
　いつも話し合うことを考える。（話合いポストに）
　① …… 話し合うことをきめる。（帰りの会）
　② …… 話合いカードを作る。
　③ …… 会議の準備をする。（司会グループ）
　④ …… 話合い
　⑤ …… 決まったことを書いて貼る。（司会グループ）

【表２　話合いの進め方（北郷小版）】

順　　序	話すことがら
１．始めの言葉	これから第（　　）回学級会を始めます。（号令は、副議長がかける。）
２．計画委員の紹介	計画委員を紹介します。（自己紹介で行う。） わたしは、議長の（　　）です。 わたしは、副議長の（　　）です わたしは、黒板書記の（　　）です。 わたしは、ノート書記の（　　）です。 よろしくお願いします。
３．今日の議題と提案理由の説明	今日の議題は、「　　」についてです。提案を（　　）さんに説明してもらいますので、よく聞いてください。では、（　　）さん、お願いします。 ありがとうございました。質問はありますか。
４．決まっている事の確認	提案理由を説明してください。（　　）さん、お願いします。
５．先生の話	先生のお話です。（　　）先生、お願いします。 ありがとうございました。
６．話合い ①話し合うこと	それでは話合いを始めます。話し合うこと①「　　」について意見を述べてください。
②話し合うこと	話し合うこと②「　　」について意見を述べてください。
７．決まった事の発表	今日、決まったことをノート書記の（　　）さんに発表してもらいます。（　　）さんお願いします。

順　　序	話すことがら
8．振り返り	今日の話合いについて「ふりかえりカード」に記入してください。記入時間は（　　）分です。
9．先生の話	先生のお話です。先生お願いします。 ありがとうございました。

〈困ったとき〉

●意見が出ないとき

＊今は、「…」のことについて、話し合っています。意見はありませんか。

＊近くの人と、（　　）分間、話し合ってください。

＊（　　）さんの意見についてどう思いますか。

●グループで意見をまとめるとき

＊ここでの話合いは、グループで意見をまとめ、発表してもらいますので、各班長さんは、リードをお願いします。話し合う時間は（　　）分です。グループになり話合いを始めてください。

＊グループの話合いをやめてください。１班から意見を出してください。

●話し合っていることから、外れた意見が出たとき

＊もう一度、今日の話合いのめあてを確認します。めあては、「　　」です。めあてにそって意見を出しましょう。

＊○○さんの意見は、話し合っていることと少しちがうので、もう一度考えてから、意見を出してください。

●意見がわかれてしまったとき

＊今日のめあては、「……」なので、よく考えて、もう一度意見を出してください。

＊意見がわかれているので、様子を見たいと思います。

Ａの意見に賛成の人、手をあげてください。

Ｂの意見に賛成の人、手をあげてください。

（　　）の意見に賛成の人が多いようです。それを参考に、だれか、まとめる意見を出してください。

●うまくまとめることができないとき

＊今までの話合いをだれか、まとめてください。

＊今までの話合いを、○○さんまとめてくれますか。

＊まとまりませんので、先生アドバイスお願いします。

＊勝手に話をするのはやめてください。私語は慎んでください。

●どうしても反対という人がいるとき

＊○○さんは、「……」というところが、どうしても納得できないようです。そのところについて、だれか説明してください。

＊○○さんは、「……」ということが、どうしても納得できないようです。め

あてをよく考えながら、話合いを続けたいと思います。

●時間がなくなってしまったとき

＊時間になりましたので、ここで話合いを終了します。決まらなかった（　　）については、計画委員の方でアンケートをとり、帰りの会で決議したいと思いますので協力ください。

【表３　発表の仕方】

	言　い　方　の　見　本
質問	「〇〇さんに質問です。……とは、どういうことですか？」 「〇〇さんに質問します。……のときは、どうしたらいいのですか？」 「〇〇さん、よく聞こえなかったので、もう一度言ってください。」
意見	「わたしは、……と思います。そのわけは、……だからです。」 「ぼくは、……について、こうしたいと思います。」 「〇〇にしたいです。そのわけは、……だからです。」
賛成	「わたしは、〇〇さんの意見に賛成です。そのわけは、……だからです。」 「〇〇さんの言ったようにすると、このようなよい点があると思うから賛成です。」
反対	「わたしは、〇〇さんの意見に反対です。そのわけは、……だからです。」 「〇〇さんの意見もよいのですが、……のようなこともあるから、……の方がよいと思います。」
つけたし	「〇〇さんの意見につけたしです。そのほかに、……すると、もっとよくなると思います。」 「〇〇さんの意見で、……のところを、……のようにかえると、もっとよくなると思います。」

＊　発表するときは、前の人が話し終わってから手をあげましょう。

以上のような話型を示し、児童が自信を持って学級会に臨み、発言するように支援している。

4　保護者との連携

保護者との連携を図るための一環として、学習指導主任より全家庭に向けて学習指導通信を発行している。テーマは以下の通りである。

【表４　学習指導便り一覧】

号	発行年月日	紙面のテーマ
1	平成29年６月22日	北郷小が特別活動の研究校になる ・北郷小の特活教育について ・特別活動のねらいは？ ・特別活動はなぜ必要か、どんなことを教えるのか？ ・北郷小の学習活動で、めざす子どもの姿
2	〃　７月６日	学力向上対策推進中 ・学力向上専門委員訪問特集 ・学力向上委員とは、学校単体ではない学力向上の取り組み ・生活目標の紹介、「あいさつ」の励行について ・北郷小教育ニュース　①論語　②研究授業
3	〃　９月21日	全国学力テスト特集 ・全国学力テストから見る学力向上のカギとは？
4	〃　９月29日	９月25日学級会の研究授業特集 ・北川先生、松葉先生、片貝先生　研究授業詳細
5	〃　10月11日	10月４日学級会の研究授業特集 ・清水先生、近藤先生、大竹先生　研究授業詳細
6	〃　11月13日	11月１、２日　学級会の研究授業特集 ・瀬山先生、寺内先生、熊倉先生　研究授業詳細 11月７日　研究発表大会授業紹介 ・堀口先生、加藤先生、早見先生　研究授業紹介

5　研究の成果と課題

本研究は、１年目は研究主題を「かかわり　認め合いながら　意欲的に活動する特別活動　－自己選択・自己決定しながら、自己有用感をもって取り組む子の育成－」とした。教師として児童の実態の把握に努め、その実態から望ましい児童像を教師にも児童にも明確に示して、児童の集団形成を育もうとした。そして、児童の実態がより明らかになった２年目には、研究主題を「自ら考え、進んで発表できる子どもの育成－学級活動で子どもの発表を引き出す教師の支援の在り方の研究－」とした。これは2020年の学習指導要領の全面実施を踏まえ、主体的に考え発表できる児童の育成に学級活動がどのように寄与するかを検証した取り組みになっている。そして、本研究が今年度の特別活動の研究発表にとどまることなく、更に継続して新学習指導要領がねらう児童像に迫るような研究の発展を見据えた内容になっている。

〈成　果〉

○「話す・聞く」領域の児童の思いと学力の相違が明らかになった。特に、本校の児童は「話す・聞く」領域の学習には興味を示すが、学力として同能力が定着していないことが分かった。思いと学力の相違が明らかになったことにより、より有効な学習の手段を考察しなければならないという教師側の課題が明らかになった。

○上記の課題を解決するために、教師側として様々な手立てが講じられたことは最大の成果である。

①　話型の工夫、確立

話すのが苦手な児童は、「どう話したらよいか」分からない。したがって、発言するときはこのような言い方をすればよい、という話型（言い方のモデル）を示せばよい。これにより、児童は自信をもって発表することができる。

②　学級会のマニュアル作成

①は個人の発表に限ったことであるが、本校では学級会全体の進行を記した学級会マニュアルを作成した。このマニュアルにより、児童は今、議事が学級会プログラムのどこを進行しているのかがよく分かり、議事のポイントに外れない発言が可能になった。

③　話合いカードの作成

児童一人一人が話合いカードをもつことで、自分のめあてをもって学級会に取り組めるようになった。

○児童の日常生活における波及

今回「話す・聞く」に指導を絞ったことで、児童の言語生活に明らかによい影響が見られた。正しい言葉遣い、そしてあいさつ等、周りの人間とのコミュニケーションが良好に取れるようになった。

○教師側の意識

教師としても、「話す・聞く」という言語領域の指導の充実が図れたことは大きな成果である。2020年の学習指導要領に対応した指導法が確立できた。

〈課　題〉

●今回は指導法の確立に主眼が置かれたため、評価においては研究が及ばなかった。児童の変容を見取るための評価法の確立が課題となる。

●学力の定着もねらったが、今は顕著な効果はあげられていない。今後の検証、場合によっては指導法の見直しも必要である。

以上、本研究はまだ完成とは思っていない。今後、更に発展が期待できる研究である。したがって、平成30年度に継続研究として国語科において「話す・聞く」を継続研究することにした。

終章　平成30年度の研究

平成29年度までの研究を踏まえ、今年度は国語科において以下の研究を推進する。

⑴　平成29年度までの学級会の成果

①　教師側が話型を示したことにより、児童は発表の時にその話型に従って話せばよいので自信をもって発表できるようになった。

②　１時間を見通した学級会マニュアルを作成することにより、児童は今、何をしているのか、次に何をすればよいのかが分かり、授業に集中でき、併せて授業の効率化が図れた。

③　話合いカードにより、児童は授業の準備とめあての確認、振り返りの機会をもつことができた。

④　評価の研究が必要という次時につながる課題が明らかになった。

⑵　国語科で求められること

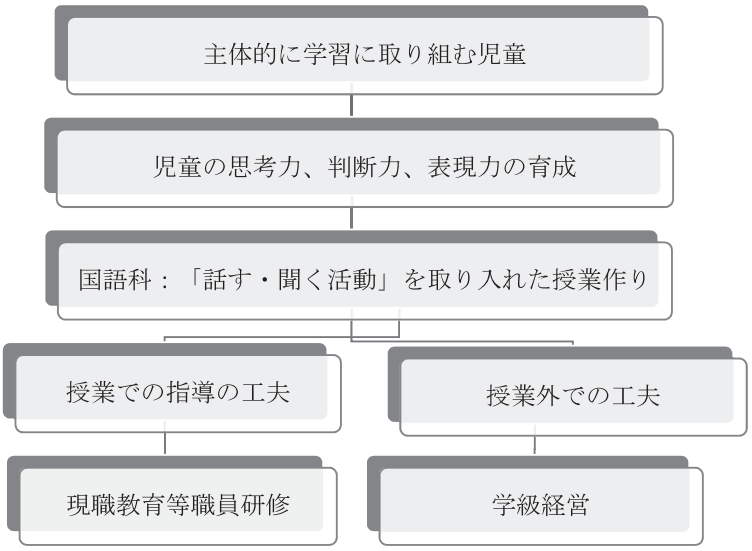
国語科では、特に「読む活動」「書く活動」についてはどの先生も授業の実践があり、教え方も確立されている。しかし、「話す・聞く活動」については、発表単元くらいしか授業の実践はないと思う。また、発表単元でも、スピーチやグループ発表をせずにリーフレット作りをするなど、「書く活動」で単元を終わらせていることもある（かもしれない）。また、「話す・聞く活動」は、記録として残らないため、どうしても年間を通して系統的に指導技術、子どもの学力を見取っていくことは困難である。

したがって、「話す・聞く活動」を国語科の授業で意図的に取り上げて授業を組む必要がある。幸い本校は、昨年度までの特活の研究から話し方の基本を教師・児童とも身に付いている。また「話す・聞く活動」は、学び合いでも必要な言語技術である。更に、授業以外の日常生活でも高められる技能である。

⑶　研究の内容

①　全体構想

【表５　学習指導便り一覧】



② 研究の内容

ア）話型の提示

学級会での話型の提示は、全体の前で自分の意見を述べることを想定して作成した。今回、国語科で話型の提示にあたり、ペア、グループ、全体など学習集団に分けた話型を考える必要がある。

イ）授業マニュアルの作成

学級会は１時間で完結するが、国語科は単元全体を通して複数時間により一つの課題を解決しなければならない。したがって、単元全体と１時間ごとのマニュアルを作成しなければならない。

ウ）学習カードの作成

児童が事前、事中、事後の学習を把握するために、学習のワークシートを作る。これまでワークシートというと、ノート代わりに授業中のことをメモしたり、振り返りに使ったりすることが多かった。しかし、学級会では、事前にワークシートを使うことにより児童の集中力を喚起し、授業の流れを把握するのにも役だった。したがって、国語科においても、単元全体を見通したワークシートを作る必要がある。

オ）評価規準の作成

現在は、学び合いの学習過程において、「振り返り」による事後の自己評価は多く行われるようになった。しかし、自己評価は主観的な評価であるため、客観的な実力把握にはならない。したがって、明確な評価規準を作る必要がある。

更に、国語科だけではなく他教科、他領域及び授業外でも次のような研究が可能である。

○授業研究

・単元で身に付けさせる力の焦点化
・特に「話す・聞く活動」を身に付けさせるための最適な単元の明確化
（ただし６、10月に研究授業を控えているので、その時期にふさわしい単元がなければ入れ替えも考えられる）
・「話す・聞く活動」の場の設定
・学び合いの場の設定

○授業外研究

・「話す・聞く活動」を充実させるための授業外の工夫についての研究
・音読の活性化
・スピーチの仕方の工夫
・家庭学習（音読）の定着

以上の研究を推進し、より児童の「話す・聞く」能力を高めていくことを誓い本稿の結びとする。